
赤と青の神話 五章

深江 碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤と青の神話 五章

【Nコード】

N0999BA

【作者名】

深江 碧

【あらすじ】

王妃の頼みを断ったクロフは、王の怒りを買い城中の兵士達から追われることになる。そんな時逃げる手助けをしてくれたのは、南の国で一緒に畑を耕した奴隷の老人の孫のコナルだった。コナルは城から逃げ出す方法を教えてくれると言う。クロフとデイリーアは連れ立ってその場所に向かうが……。北の国編の後編です。この章と、もう一章で終わる予定なので、もうしばらくお付き合いください。

決別 1

五章 決別

クロフはデイリーアの部屋へたどり着くなり、寝台に駆け寄った。肩で息をしながら、寝台の支柱に寄りかかる。

「どうしたんだ？」

デイリーアの青い瞳と目があった。

槍を手に飛び込んできたクロフを、不思議そうに眺めている。

「薬は飲んだ？」

「え？」

訳がわからないとばかりに、デイリーアは眉をひそめる。

「今日の薬は飲んだか？」

クロフは早い息を繰り返しながら、デイリーアに詰め寄った。

「あ、ああ。今日の朝老婆に出された薬は、もう飲んだが」

クロフの顔色が今にも倒れそうに蒼白になったのを見て、デイリーアは聞き返す。

「どうした？ その薬に何か入っていたのか？」

「何って」

クロフは一呼吸置いて、デイリーアに耳打ちする。

クロフの取り乱した態度とは対照的に、デイリーアはひどく落ち着いていた。

「そっか、毒か」

デイリーアは寝間着のまま寝台から降りると、身の回りの荷物をまとめ始めた。

「ここも潮時だな。暇つぶしに荷物をまとめておいて正解だった。一刻も早く、逃げ出した方がいい」

クロフはデイリーアの腕をつかみ、強引に振り向かせた。

「毒はいいのか？ そちらの治療の方が先だろ！」

デイリーアは顔色一つ変えず、答える。

「しかし解毒薬が無いのだろう？ ならば、どう治療しろと言うのだ。老婆に剣を向け、命乞いをさせるか。そんなことは出来ないだろう？ それにわたしなら、大丈夫だ」

「どうして」

クロフが理由を尋ねる前に、デイリーアのため息がそれを遮る。

「森にいる間、わたしも無為に時間を過ごしていた訳ではない。人間があらゆる手を使ってわたしを殺そうとしたように、わたしもあらゆる手を使って生き残ろうとしてきたのだ。毒草についてもその一つだ。わたしは森にあるあらゆる毒草を一通り自分の体で試し、耐性をつけたのだ」

クロフは釈然としないながらも、デイリーアに促されるままに荷物を背負う。

槍を持ち直し、部屋を出て行こうとしたところで、デイリーアに後ろから呼び止められた。

「待て」

クロフが振り返る間もなく、廊下に足音が響く。

「王妃様の命を奪おうとした奴等はどこだ！」

兵士達が数人、部屋になだれ込んでくる。

クロフはデイリーアを背中にかばい、槍を構える。

「気をつける。奴等は火の術を使うという話だ。うかつに近づくな！」

兵士の隊長らしい人物が叫ぶ。

兵士達は槍を構え、遠巻きに二人を取り囲み出口をふさぐ。

クロフとデイリーアはじりじりと壁際に追いつめられ、ついには壁に背を付けた。

「こっちだ」

デイリーアはクロフの服を引っ張り、あごで窓を示す。

クロフはちらと窓を振り返り、一瞬のためらいの後、デイリーア

を抱え窓から飛び降りた。

「奴等が窓から逃げたぞ！」

兵士達の叫びを聞きながら、クロフは迫ってくる地上を見下ろす。

「水よ、吹き上げれ」

デイリーアが一声叫ぶと、石畳が裂け、水柱が立ち上った。

クロフは水しぶきに飲み込まれ、視界が白一色に染まる。

一瞬だけ体が浮くような感覚に襲われ、固い地面の上に足が着いた。

クロフの足元からは、こんこんと清水が湧き出している。

「大丈夫か？」

デイリーアに手を差し出され、クロフは水で濡れた手を握りしめる。

クロフは立ち上がり中庭を見回す。

兵士達の姿が無いのを見て取ると、デイリーアの手を引いて走り出した。

中庭の石畳に広がった水が、日の光を受けて白く輝いていた。

馬小屋にたどり着いたクロフは、薄暗い小屋の中をのぞき込んだ。暗い馬小屋の中からは、飼料と獣の匂いが混じり合って漂ってくる。

小屋の中には馬以外に動くものはなく、クロフは警戒しながら小屋の中に足を踏み入れた。

「誰かいるぞ？」

デイリーアが暗がり指さす。

暗がりに動く人影に、クロフは手に持っていた槍を構える。

「誰だ！」

クロフは槍の先を人影に向け、鋭い声を上げる。

「待ってくれ。おれはあんたの味方だ」

人影が両手を挙げて、クロフのいる入り口の方へ歩いてくる。

クロフは油断無く人影に槍を向けていたが、顔が見える位置まで来ると、あつと声を上げた。

その人影は、昨夜宴で会ったコナルだった。

「どうして、ここに？」

クロフが驚いているのを見て、デイリーアは怪訝な顔をする。

しかしコナルの雰囲気、南の国で出会った老人と似ているのを見て、納得したらしい。

「つまり、あの男は老人の親族というわけだな？」

デイリーアはクロフの後ろから、コナルを訝しげに見つめている。

コナルは両手を挙げたまま、クロフのそばまで歩いてくる。

「どうして、あなたがこんなところに？ それに味方って」

コナルは屈託のない笑顔を浮かべる。

「それは、あんた達があんたの王妃の鼻を開かしてくれたからさ。普段お高くとまったあの王妃が、あんなに怒り狂っているなんて、滅多に見られないことだよな。なあ、トウラヌ」

コナルは背後の暗闇に声をかける。

暗闇からはクロフの栗毛の馬を連れた中年の男が歩いてくる。

「まあ、そうですね。わたしも、王妃があんなに怒り狂った姿など、今までに一度見たことがあるかどうかです」

コナルは心底おかしそうに笑う。

クロフはそんなコナルを呆然と見つめている。

「ああ、すまない。つまり、おれ達は普段から王妃のことを快く思っていないかった。元々は南から来た女奴隷のくせに、王に可愛がられていると言うだけで、好き放題やっているんだからさ。おれ達も、ちよつと腹に据えかねていたとこだ」

クロフはようやく構えていた槍を下ろし、警戒を解いた。

「つまり、あなたはぼく達が王妃から逃げるのを手助けしてくれると？」

コナルは大きくうなずく。

「おれ達だけじゃない。族長達も、王の家臣達も、あんた達がこの

城から逃げるのに協力すると言っている」

クロフは王妃があそこまで王の家臣や族長達を嫌っていた理由が、何となくわかったような気がした。

そして王妃が彼らをそう思っているのと同じように、彼らも王妃を毛嫌いしていたのだった。

「しかし」

そこでコナルの顔に影が差す。

「厄介なことに、王妃は王に泣きついて、城中の兵士を味方に付けたんだ。城中の兵士全員があんた達を捕まえようと躍起になっている。城門は閉じられ、城からは蟻一匹這い出る隙間が無いほどなんだ」

クロフは自分の乗ってきた馬の手綱を中年の男から受け取る。

今まで黙り込んでいたディリーアが口を開く。

「それで、本当にこの城から脱出する方法が無いわけではあるまい。地下通路とか、古井戸とか、他に脱出出来そうな場所は無いのか？」

コナルは考え素振りをして、渋々ながらつぶやく

「あるには、あるんだが。みんなその場所を恐れて、近づこうとはしないんだ」

「それは好都合だな」

ディリーアは意地の悪い笑みを浮かべる。

「それならかえって逃げるのには都合がいい。さっさとその場所を教えてくれないか？」

ディリーアはコナルに詰め寄った。

「しかし、やめた方がいいと思うぞ」

コナルが話すのを渋っている、背後から中年の男が歩み出る。

「お二人とも、どうぞこちらへ。若の代わりに、わたしが案内しましょう」

中年の男が先頭に立って、クロフとディリーアと栗毛の馬がその後ろに続く。

コナルだけが最後まで渋っていたが、のろのろと三人と一頭の後

るに続いた。

決別2

クロフ達が案内されたのは、城の隅にある古井戸だった。辺りには茨がびっしりとはびこり、ほとんど人の手が入っていないのを物語っている。

城壁の高い石垣はツタや枯れ草が絡まり、古井戸のつるべは風に揺れてきいきいと乾いた音を立てている。

「ここです」

先頭に立つ中年の男は、城壁の側にある古井戸を指で示した。

「この古井戸の底に、城の外に通じる抜け道があるという話です」

「話、とは？」

不思議に思ったクロフが聞き返す。

「誰も確かめたことがないからだ。北の国には、城や王を見捨てて逃げる腰抜けはいないってことだ」

コナルは肩をすくめる。

デイリーアがコナルに疑いの目差しを向ける。

「それは、本当のことか？」

中年の男が代わりに答える。

「本当は、この古井戸が作られた当初、事故があつてそのまま使われなくなったのです」

「まあ、最近は古井戸が、地下に通じているとか、夜に奇妙な声が聞こえるとか、気味の悪い話もあるけどな」

一行は枯れ草をかき分けて、崩れかけた古井戸に近づく。

「真っ暗だな」

デイリーアが古井戸の中を恐ろしげもなくのぞき込む。

「底が見えないほど深い、ということかな」

クロフもつられて井戸の底をのぞく。

デイリーアが顔を上げると、古井戸から少し離れたところに一人で立つコナルと目があった。

「もしかして、怖いのか？」

デイリーアは疑念に満ちた目でコナルを見つめる。

「そ、そんなことは無い」

言いながらも、コナルは一向に近づいてこない。

「やはり、怖いんだな」

デイリーアは呆れたようにため息をついた。

「断じて、そんなことはない！」

クロフはデイリーアとコナルのやり取りを聞きながら、井戸の底に目をこらした。

暗闇に目が慣れてくると、井戸の底に揺らめく青い水面が見える。

「この井戸には水があるようだけれど、外に通じる道は」

クロフは顔を上げ、側にいる中年の男に話しかけた。

言いかけて、クロフは古井戸を囲う石垣に置いた手が滑るのを感じた。

古井戸の石垣が崩れ、風雨によってもろくなった石が次々と井戸の中に落ちていく。

クロフは体勢を崩し、もう一方の手が何かをつかむように宙に伸ばす。

中年の男の伸ばした太い腕は、クロフの手に届かず、虚空をつかむ。

クロフは叫ぶ暇もなく、井戸の暗がりへとその身を躍らせた。

「おい、大丈夫か！」

クロフが落ちた井戸の中をのぞき込み、コナルが叫ぶ。

叫び声は井戸の暗闇に飲み込まれ、物音一つ返ってこない。

デイリーアは不安に駆られる気持ちを抑えながら、井戸の底を見下ろしている。

「井戸に縄を下ろして、彼の様子を一刻も早く確かめてこないと」

中年の男は手近の枯れ木に器用に縄を結びつけ、縄の丈夫さを確

かめるように何度か引つ張る。

「おれが井戸の中のあいつの様子を見てきてやる」

真つ先に名乗りを上げたのは、さっきまで井戸には近づきもしなかつたコナルだった。

「待て。わたしが行く。わたしに行かせてくれ」

デイリーアは今にも倒れそうな青白い顔色でつぶやく。

縄を持っていた中年の男は、二人の顔を見比べる。

「では、若にお願いしましょう」

中年の男はコナルの腰に器用に縄を結びつける。

「待て、わたしも」

言いかけて、コナルに肩を押さえられる。

「ここで待っているよ。いくら実の兄が心配だからって、お前まで怪我したらどうにもならないだろう？」

コナルは縄の片方を腕に巻き付け、井戸の内側の石に足を引っかけた。

もう片方の縄の端を中年の男が持ち、青年の動きにあわせて緩めていく。

コナルの姿は徐々に小さくなり、暗闇に消えていった。

デイリーアは祈るような気持ちで、縄の消えた先を見つめていた。

水の流れるかすかな音で、クロフは目を覚ました。

ぼくは、井戸から落ちたのか？

それにしても体が軽く、痛みを感じなかった。

クロフは辺りを見回し、ゆっくりと立ち上がった。

辺りには背の高い木々が生い茂り、鋭く長い刺が幾重にも絡まり合っている。

空を見上げると、夜空には青い月がぽっかりと浮かんでいる。

いつの間に、夜になったんだろう。

クロフは鈍く痛む頭を押さえ、考える。

いや、そもそも井戸の中に落ちて、どうして空に月が見えるのだらう。

それにこの林は。

「ここは死の国へ通じる道。青い月の光導くリンボクの林。お前も一度は訪れたであらう。もう忘れたか？」

クロフから少し離れた茂みに、青い頭巾を目深にかぶった男が立っている。

男はゆっくりと顔を上げる。

青い月の光に照らされて、男の白い顔と金の瞳がこちらに向けられる。

「ここが死の国に通じる道ならば、あなたはさしずめ月の神の使者といったところですか？」

クロフは神殿で伝え聞いた伝承を思い出す。

月の神の使者は青い衣をまとい、死に瀕した人間の前に現れ、その魂を死の国に連れて行く。

「ぼくの魂を、死の国に連れて行くとういのですか？」

青い衣の男は何も答えず、白い口元を奇妙な形にゆがめる。

まるでクロフの態度をあざ笑っているかのように。

「何がおかしいのです？」

クロフは男の態度に腹が立った。

男はなおも笑い続ける。

「何がおかしいんですか！」

そこでようやく男が笑うのをやめた。

頭巾をかき上げ、リンボクの間から金の瞳でクロフの方をじっと見つめる。

「わたしのことを忘れたか、火の神よ」

男の髪は朝早く漂う霧のように白く、瞳は夕暮れ時に現れた星のように金色に輝いている。

「まあ、あんなことがあれば無理もないか。思い出したくないことは、素直に忘れてしまった方が楽だからな。それとも、夜明けの三

神に、その記憶と力を引き渡したか？」

男は口元を手で押さえ、くっくつと声を立てて笑う。

クロフは男のその態度に無性に腹が立った。

「ぼくが何を忘れていると言っんです？」

クロフはリンボクの刺が服に引っかかるのもかまわず、男の方へ走っていく。

しかしいくら走っても、男との距離は一向に縮まらない。

「お前も、あの娘も、哀れなものだな。せつかく人に生まれ変わる
ときに、神であった頃の記憶を消してやったのに。わざわざ苦しむ
ために過去を思い出そうとするとは、愚かなことだな」

男は長いため息をついた。

クロフは男に近づこうと、リンボクの木々を必死でかき分けた。

「何が哀れだと言っんだ」

木々の枝をかき分けているうちに、クロフの手足は傷つき、細い
擦り傷からは大粒の赤い玉が浮かんでいる。

「お前こそ、なぜ自分の素性を探ろうとする？ 知らなければ苦し
むことも無いというのに」

手にはひっかき傷が無数に走り、服のあちこちからは血がにじん
でいる。

「本当に、哀れだな」

男は青い裾をつと横に振る。

クロフはようやく男のいる茂みにまでたどり着いた。

「お前は、何を知っていると云っんだ！」

クロフは男の青い衣を乱暴につかむ。

男は表情一つ変えず、蔑むような金の瞳でクロフを見つめている。
「話せ！ 全部話せ！ ぼくが一体何を忘れていると云っんだ！」

男はクロフの燃えるような赤金色の瞳から目をそらし、ふっと長
いため息をついた。

「いいだろう」

男がそうつぶやくと、リンボクの枝がざわざわと夜風に鳴った。

冷たい風がクロフの首元を通り過ぎ、背筋を怖気が走る。
リンボクの木々はぎいぎいときしみを立て、空ではごうごうと風
が渦巻いている。

青い月が輝きを増し、男の金の瞳に狂気が宿る。

「いいだろう。そんなに知りたいのなら、教えてやるう」

男は白い口元を奇妙に歪め、妖しい笑みを浮かべた。

クロフは男の胸ぐらをつかんだまま、動けなくなった。

男の金の瞳から目がそらせなくなり、顔に出来た擦り傷の上を冷
や汗が伝い鈍く痛む。

男の顔の肉はただれ落ち、その両目にはぽっかりと暗い空洞があ
らわになる。

クロフはそれでも男の暗い両目から目をそらすことが出来なかつ
た。

体が芯から凍り付いてしまったかのように、指一本動かすことが
出来ず、心臓が早鐘のように打ち付ける。

「思い出すがいい。忌まわしい過去の記憶を」

周囲の景色が歪み、男の低い声がクロフの耳の奥に木霊する。

「それがお前の望みであるのなら」

クロフは青い光の奔流に飲まれ、やがて何も見えなくなった。

決別3

水面から差し込む日の光のように、淡い水色の光がクロフのいる部屋の中を照らしている。

クロフは大きな椅子に座り、床に着かない両足をぶらぶらと揺らしている。

部屋の中からも外からも、物音一つ、話し声一つ聞こえてこない。静寂に耐えられなくなったクロフは、椅子から飛び降りて部屋の戸口に走っていく。

部屋の外に出ると、長く真っ直ぐな廊下がどこまでも続いている。

ここは、神殿の廊下だ。

クロフは首を傾げた。

自分のいる場所は神殿の中と決まっているのに、どうして当たり前のことを考えるんだろう、と不思議に思ったのだ。

クロフは今まで考えていたことなどすっかり忘れ、長い廊下を走っていく。

廊下の途中にある部屋をのぞき、神官達の姿を探す。

普段ならば、クロフの姿を見つけただけで神官は笑顔であいさつし、声をかけてくれるはずだった。

それが今日に限って、いつもと雰囲気が変わっていた。

のぞいた先には神官の姿は見え、クロフはさっきからずっと人とすれ違っていないかった。

「南と北の間で、また戦争が起こるとか」

不意に大きな扉の中から、神官達の話し声が聞こえた。

クロフは廊下の突き当たりであった、大きな扉に近づき、隙間から中をのぞき込んだ。

細い扉の間からは、うっすらと白い光が漏れている。

高い天井の部屋の中では、何十人も大人達がテーブルを囲んで話し合っている。

「各地にいる神官達の話ですと、今回は南が北に攻め込んだとか」
周りにいた神官達のため息が聞こえてくる。

「確か、以前は大麦の収穫が少ないという理由で攻め込み、今回は牛の乳の出が悪いという理由で攻め込んだと聞きます」

「全く、あの王にも困ったものですな。前の西の上王がご存命なら、このようなことも起こらなかっただろうに」

向かいのテーブルから別の声上がる。

「あら、噂によると、あの南の王は、西の上王の位をほしがっているとか。自分の身の程もわきまえず、愚かだこと」

広間にささやきが満ち、神官の一人が椅子から立ち上がった。

「今こそ、神殿の権威を示すべき時です」

一人が席を立つと、それに賛同するように、周りの神官も椅子から腰を上げる。

「そうです。彼らの愚かな争いを止めるのです」

「我々には、それを止めるだけの力がある。こんな時こそ、神託にあるあの少年の力を使うときです」

今までどよめいていた広間が、水を打ったように静まりかえる。

クロフは大人達の話している内容まではわからなかった。

しかし胸の奥ではとても嫌な気持ちが始まっていた。

「それは、まだ早いのではないでしょうか？」

テーブルの席から疑問の声上がる。

「少年はまだ幼く、火の神の力を十分に使いこなしているとは、とても思えません」

その意見に対し、反対の声上がる。

「早いことは無いのではないか？ 戦場に出るのも、良い経験になるだろうし、力の使い方を覚えるのには、ちょうど良い機会だと思う」

「わたしもそう思います」

「いや、わたしは反対だ」

様々な意見が飛び交う広間の扉から離れ、クロフは長い廊下を自分の部屋目指して駆け出す。

神殿の大人達は、いつもこうだ。

クロフは痛む胸を押さえ、自分の部屋の戸口をくぐる。

その瞬間、目の前が再び青い光で満たされた。

青白い光の中に浮かび上がってきたのは、神殿の中庭の景色だった。

緑の草地のそばの白い柱に、寄りかかっている二人の男女が見える。

一人は初老の男で、もう一人は中年の女だった。

二人とも白い衣を着て、長い杖を手にしている。

クロフにとつて、二人は神殿内で心の許せる数少ない人物だった。二人は白い柱の影に隠れるように、小さな声で何事か話している。

普段とは違う気配を感じ取ったクロフは、足を止め中庭の向かいの柱の影から二人の様子を眺めていた。

「いつ、彼に本当のことを話したら良いのでしょうか」

女神官が初老の神官に尋ねる。

「まだ早いのではないか？ 今のあいつに事実を受け入れられるとはとても思えん」

老神官は眉間に細い指を押し当てる。

「では、いつごろ話をすればいいのです？ わたしはこの十年近く、一時も心の安まることはありませんでした。彼の母親が亡くなったのは、わたしのせいなのではないかと」

「滅多なことを言うではない！」

老神官が厳しい声を上げる。

「あれは事故だったのだ。誰のせいでもない。ましてやお前のせい

ではない。我々は知らなかったのだ。神殿が彼の母親に金を送っていないかったことや、母親に彼をあわせないでいたことも。何も知らなかったのだ」

クロフは二人の話をそれ以上聞かず、柱に背を向けて歩き出した。ああ、やっぱり。

クロフはすれ違った神官達にあいさつも交わさず、自分の部屋に入り、鍵を閉めた。

わかっていて。わかっていたことなのに。

神官達の噂の端々で、すでに母親が死んでいること、それが神殿のせいであることなどは聞き及んでいた。

クロフは壁にもたれかかり、そのまま床に座り込んだ。

実際に話しているところを目撃し、言葉を聞いた途端、クロフは暗闇に突き落とされたような気分になった。

頭ではわかっていても、気持ちの面では納得していなかったのだ。心の片隅のどこかで、幼い子供のように母親は生きていると信じて疑わなかったのだ。

黒い雨雲が空を覆うように、クロフの心にも絶望の色がじわじわと広がっていった。

青い水面に波紋が広がるように、クロフの目の前の景色がぼやけ、代わりにある冬の光景が映し出される。

決別 4

気が付けば、クロフは白い雪の上に座り込んでいた。

灰色の空から、雪が絶え間なく降り続き、街の建物を一面白く染めている。

「ここは」

クロフは雪の上に立ち上がった。

クロフが雪をつかもうと手を伸ばすと、白い霧のようにクロフの手をすり抜けていく。

ここは夢の中か？

クロフは雪の寒さも、地面を踏んだ感触も感じられず、まるで白昼夢を見ているかのようだ。

クロフは雪の積もった街を見回し、遠くに見える大きな建物の屋根を見上げる。

一番奥の建物へ導くように、大通りが延びている。

大通りには雪の寒さに身を縮めた人々が荷物を担ぎ、白い息を吐きながら歩いている。

ここは、神殿の外の街か？

クロフは過去に神殿からこっさり抜け出したときのことを思い出す。

その時は何もかもが珍しくて、人々の賑わいに目を奪われ、ろくに街の外観など見ていなかった。

改めて周りを見回してみると、神殿の窓から眺めていた建物が、あちらにもこちらにも見えた。

しかしクロフは雪の日に街に出たことはおろか、この通りを一人で歩いた記憶さえない。

一度も見たことのない光景のはずなのに、クロフは不思議と懐か

しい気持ちが蘇った。

知ってる。

クロフの足は無意識のうちに走り出していた。

ぼくは、この光景を知っている。

知らず知らずのうちに、神殿の入り口へと向かっていた。

クロフは大きな神殿の屋根を目印に、通りの角を右に左に曲がっていく。

クロフは息も切らせず、雪に足跡も付けず、門の前にたどり着いていた。

「母さん」

クロフは我知らず叫んでいた。

クロフの見つめる先には、寒さに身を縮めながら歩く、一人の女がいた。

クロフは女に駆け寄り、その手を取った。

「母さん、母さんだね？」

しかしその手は雲をつかむように通り抜け、その指先には何の感触も残らなかった。

女は無心に神殿への石段を登っていく。

門の前には神殿の衛兵が槍を構え、いかめしい顔付きで立っている。

いってば駄目だ。

クロフは女に追いつき、その前に立ちふさがった。

「神殿に行つては駄目だ！」

彼女の体は霧のようにクロフの体を通り抜け、足を止める気配を見せない。

やがて門の前にたどり着いた女は、神殿の衛兵に止められ、立ち止まった。

「女、神殿に何の用だ？」

「ここは、お前のような者の来る場所ではない。早々に立ち去れ」
女は頭を下げ、口を開く。

「わたしの息子がこの神殿で学んでいます。息子の顔を一目見たいと、長い道のりをここまでやってきたのです。どうか一目息子と会わせてください。一目だけでいいんです」

女の真摯な態度に、衛兵は顔を見合わせる。

「お前のような貧しい女が母親とは」

「子供の名は、何というのだ？」

女は低く頭を下げる。

「はい、クロフと言います」

衛兵の顔色が変わった。

「少々お待ち下さい」

衛兵の一人が慌てて門の中に入っていく。

しばらく待った後、衛兵は一人の神官を連れて戻ってきた。

「子供と会いたいというのは、この女か？」

神官は蔑むような目付きで女を見下ろしている。

「はい」

衛兵が短く答える。

クロフはその男を見ていると、理由もなく不快感に襲われる。

その目は死んだ魚のように濁り、気だるげな表情が顔に張り付いている。

「なるほどな」

神官は杖にもたれかかり、考える素振りをした。

「どうか、どうか、クロフに会わせてください」

女は膝を折り、雪の上に頭を垂れる。

衛兵二人は気まずい表情をして、顔を見合わせている。

「そうは言われてもな」

神官は杖で石の床を叩く。

「我々もそう暇ではないのだ。そんなつまらん用事で、部外者を神殿内に入れることは出来ん」

女は寒さで冷えた体を縮ませ、必死に頭を下げる。

「どうか、一目だけでも」

神官は杖で石の床をこつこつと叩く。

「駄目だ、駄目だ。ここはお前のような平民が来るところではない」
「一目だけでいいのです。決して、神官様には御迷惑はかけません。お願いします」

女は神官の足元にすがりついた。

その瞬間、まるで汚い土でも靴に付いたかのような素振りで、女の腹を蹴り上げた。

「平民の女風情が、汚い手で触るな！」

女は雪の上につつぶせに倒れた。

神官は杖を振りかざし、何度も女の体を打ち付ける。

「何様のつもりだ。ここはお前のような薄汚い女が来ていい場所じゃないんだ！」

「すみません、すみません」

女は許しを請うように、地面にうずくまっている。

「やめろ！」

クロフは叫んだ。

クロフは女に駆け寄り、神官との間に割り込んだ。

神官の杖はクロフの体を通り抜けるだけで、どうすることも出来ない。
「やめろ、やめろ！」

クロフは大声で叫び、その目から涙が溢れる。

衛兵の二人は苦しげな様子で、止めるべきか迷っているようだった。

不意に女が大きく咳き込んだ。

杖を振り上げていた神官は動きを止め、うずくまる女を見下ろす。
女の口からは血が滴り、雪の上に赤い血だまりを作る。

クロフは女の背中に手を伸ばしたが、その背に触れることはかなわなかった。

外から見ただけでも、女の怪我が重いことはクロフにはすぐにはわかった。

「すぐに神殿で治療を！」

クロフは神官を見上げる。

神官は自分の方に血が飛び散るのをいやがるように、門の方へ後ずさる。

「だ、誰か」

神官は蚊の鳴くような声でささやく。

「この女を外の通りに捨ててこい」

神官は震えながら、白い門の柱に寄りかかる。

衛兵は戸惑うように門の中に視線を投げかける。

「しかし、このようなことが上に知られれば」

「う、うるさい！ それがばれる前に、女を捨ててくればいいだろう？ お前の頭は空っぽか？ さつさと捨ててこい！」

まだ泣いている衛兵達に、神官は声を荒上げた。

「さつさと行け！」

「やめろ！」

クロフは叫ぶだけで、神官につかみかかることも、衛兵を止めることも、ましてや母親を助けることも出来なかった。

衛兵は恐る恐る女の体をつかみ、持ち上げた。

その拍子に、女が激しく咳き込み、口からは大量の血がこぼれ出る。

衛兵達はそれを出来るだけ見ないようにして、女を運び上げた。

女を担いだ衛兵二人は、雪の石段を一步一步下っていく。

クロフも重い足取りで、それに続く。

女の口からしたたり落ちた血が、目印のように点々と雪の上に赤い染みを残していく。

雪の降り続く曇天の下、道ですれ違う者はほとんどいなかった。すれ違った者はみな目をそらし、早足に通り過ぎた。

「ここら辺でいいだろう」

衛兵達がたどり着いたのは、貧しい家々がひしめき合う、小さな路地だった。

路地は静まりかえり、家の戸口は固く閉ざされている。

衛兵は路地に女を放り出すと、後ろを振り返らず走り去っていった。

クロフは口から血を流し、仰向けに横たわる女に近づき、血の気の引いた顔をのぞき込む。

「母さん」

クロフの呼びかけに、女の返答はなかった。

女は虚ろな目で暗い雪空を見上げ、苦しげ息を吐き出している。

「クロフ」

女の唇がかすかに動いた。

白い息がゆらゆらと灰色の空に吸い込まれていく。

クロフの目から涙がこぼれた。

「ごめん、ごめんよ、母さん」

クロフは母親に寄り添うように、声を上げて泣きじゃくった。

母親の白い吐息が消えるまで、その体が白い雪に覆われて見えなくなるまで、クロフは決してその場を動こうとはしなかった。

それはクロフの夢に見た光景に似ていた。

悪い夢のように、母親の死はクロフの心を苦しめ、むしばんでいく。

それは月の光をも吸い込んでしまう夜の水のように、静かにクロフの心を満たしていった。

決別 5

夜空に青い月がかかっていた。

リンボクの木々が生い茂る林で、クロフは一人立ち尽くしていた。「どうだ、思い出したか？」

クロフと向かい合うように、青い頭巾をかぶった男が立っている。

「お前が望むのなら、生まれる以前の記憶、火の神として天上にいた頃の記憶も見せてやるが」

クロフは答えなかった。

クロフは拳を握りしめ、肩を振るわせ、怒りとも悲しみとも付かない感情が、彼の心の中に宿っていた。

男の声はもはや、クロフの耳には届いていなかった。

男がそこにいることさえ、今のクロフにはわからなかった。

母親が殺された深い絶望と怒りが、クロフの心を支配していた。

「やれやれ、これくらいで心が壊れるとは、人間とは脆いものだな」男は青い衣をひるがえすと、暗い夜空を振り仰いだ。空には青い月が煌々と輝いている。

「汝に、夜の絶望と狂気を、そして一時の安らぎが与えられんことを」

青い衣の男は白い口元を歪め、くっくつと声を出して笑う。

リンボクの枝に紛れるように、男の姿は闇に溶けた。

井戸の底にたどり着いたコナルは、ゆっくりと水の中に足先をひたす。

透明な水面には、井戸の中に差し込むわずかな日の光が白い粒を散らしている。

コナルは自分の体に巻き付けた縄を二度引つ張り、井戸の底に着いたことを上に知らせる。

「おい、大丈夫か！」

コナルは暗く沈む井戸の横穴に向かって呼びかけた。

「無事だったら、返事をしてくれ！」

コナルの声が虚しく石壁に木霊する。

井戸の底を見回してもクロフの姿はなく、暗闇からは物音一つ返ってこない。

静まりかえった闇の底から、水の流れるかすかな音だけが聞こえてくる。

不意に、赤い火が暗闇の中に灯った。コナルは大声を張り上げる。

「おい、大丈夫か！ 怪我はないか？」

コナルはその火の燃える方へと走っていく。

水をかき分け、水しぶきを上げてコナルは足を進める。

赤い火は明るく揺らめき、徐々に大きな炎へとなっていた。

その炎が人の背丈をゆうに超えるほどに燃え上がったのを見て、

コナルはようやく不審に思った。

「なあ、本当にお前クロフなのか？」

コナルは足を止め、赤い炎を見上げる。

「まさか、井戸の底に住むという化け物に食われちゃったとか？」

足は震え、声は上ずり、コナルは後ろに後ずさった。

赤い炎は徐々に形を成し、さらに大きく燃え上がり、暗闇を真昼のように照らし出す。

炎は赤いたてがみのように横穴の天井を照らし、太くがっちりした四肢には鋭く長い爪が生え、しなやかな体躯は金色に輝いている。血のように赤い瞳は、狂気の色を宿し、コナルを見下ろしている。炎は獅子の姿を闇の中に浮かび上がらせた。

コナルは悲鳴をかううじて飲み込み、井戸の光差す方向へ引き返す。

後ろも振り返らず、何度も何度も水に足を取られ、転びそうにな

りつつ、コナルは石壁の前にたどり着く。

「ば、化け物だ。井戸の底に化け物がいるぞ！」

コナルは縄を引っ張り、井戸の上を見上げ叫んだ。

背後からは獅子のうなり声と、水をかき分ける音が近づいてくる。

「くそつ、槍さえ持っていれば」

縄が上にするすると巻かれ、コナルの体がゆっくりと宙に浮く。

獅子の爪が空を裂き、間一髪のところまでコナルはそれをかわす。

コナルは石壁を足で蹴りながら、巨大な獅子の姿が遠ざかっていくのを見下ろしていた。

地上に降り着いたコナルは、息を切らせ早口に叫ぶ。

「この抜け道はだめだ。井戸に落ちたクロフは、もう化け物に食われちゃった。くそつ、こんなことになるかわかっていれば、別の方法を探したものを」

コナルは地面に両手をつき、頭を垂れる。

「若」

中年の男が、コナルを気遣うように声をかける。

デイリーアは手で口元を覆い、一人考え込んでいた。

「今、化け物と言ったな？ それはどんな化け物だった？」

うつむいていたコナルは、デイリーアの冷淡な口調を耳にし、顔を上げた。

「兄の死を悲しむより、化け物のことが先か？ たいした使命感だな」

コナルはのろのろと立ち上がる。

「それともまさか、死んだ兄の敵を討とうって言うのか？ やめと

け、お前がかなうような相手じゃないぞ」

デイリーアは答えなかった。

うつむき、考え込んだままだ。

「確かに、お前の兄の敵を討ちたい気持ちはわかる。その度胸は、

女にしとくのがもつたないくらいだ。だがな、相手は獅子の化身だぞ。一人で勝てる相手ではないんだ」

ディリーアは顔を上げ、青い瞳でひたとコナルを見据える。

「いま、獅子と言ったか？ それは炎に包まれた獅子の姿をしていたか？」

ディリーアはコナルに詰め寄った。

「そ、そうだ」

コナルは気まずそうに顔をそらす。

ディリーアはコナルから離れ、背後に立っていた中年の男を見上げる。

「わたしを井戸の中に下ろしてくれ」

「それは出来ません」

中年の男はゆっくりと首を横に振る。

「若の言っているとおりはです。あなたが行っても、返り討ちにされるだけです」

ディリーアがなおも口を開こうとしたとき、二人の間にコナルが割り込む。

「落ち着けよ。今はそんなことをしてる場合じゃないだろう？」

コナルはディリーアの両肩をつかみ、乱暴に揺さぶる。

「あの王妃から逃げるのが先だろ？ 幸い、お前一人かくまうのなら、言い逃れする方法はいくらでもある。それでもしお前が兄の敵をどうしても討ちたいというのなら」

コナルはそこでいったん言葉を切る。

「おれのところに来い。敵は必ずおれが討つてやるから」

ディリーアはわずかに青い目を見開いた。

コナルの真摯な目差しから逃げるように、井戸のたもとの枯れ草を見下ろす。

「有り難いな」

ディリーアは肩に乗られていたコナルの両手をそつと振りほどく。「有り難いが、残念ながらそれは出来ない」

ディリーアはコナルから離れ、井戸の石垣に走り寄った。

二人を振り返り、寂しげに笑う。

「炎の獅子は火の神の原初の姿。本来の火の神は激しい気性の持ち主でな。浮気が知れたら、浮気相手はもちろん、わたしまで炎に巻かれてしまう」

そう言って、肩をすくめる。

ディリーアは木の根本に結びつけられた縄を握りしめ、井戸の中に飛び降りた。

「おい！」

駆け寄るのが早いか、コナルは縄の先をつかむ。

「何を考えている！ 死ぬ気か？」

コナルが縄の先をたぐり寄せると、もうその先にディリーアの姿は無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0999ba/>

赤と青の神話 五章

2012年1月6日08時53分発行